

## 最後まで頑張れる人間になりたい！

### 〈市内大会に向けて (R6. 6. 6 激励会 校長講話)〉

父は、小学校5年生の娘の校内マラソン大会の応援に行った。校舎周りを2周するマラソン大会。体型もポッチャリ型で、決して運動が得意ではない子だったので初めから成績は期待していなかったが、結果は最下位だった。

娘にこう言った。「よくがんばったね。一番輝いていたよ。」娘は喜んだ。小学校6年生になった翌年、またマラソン大会の応援に行った。スタートの場所に集まる子どもたちの様子を見てみると、自分の娘だけが、ポツンと一人ぼっちで集団の後ろに佇んでいた。

父は思った。(はじめからやる気のない態度だなあ。それでなくても足が遅いんだから、少しでも有利になるように前の方にいればいいのに。本当は走りたくないんだろうなあ。そうだよな、去年はビリだったし。) 結果は、今年もまた昨年同様の最下位だった。

父は娘にこう言った。「今年もよくがんばったね。今年も、とっても輝いていたよ。」スタートの時に抱いた思いは、特に告げなかった。

小学校の卒業が間近になったある日、娘が卒業文集を持ち帰った。中に、小学校の思い出の作文が載っていた。娘の作文のタイトルは『マラソン大会のこと』だった。父はその作文を読んでハッとしました。

「5年生の時のマラソン大会で、私は、校舎の裏のあたりを走っているとき、誰も見ていなかったもので歩いてしまいました。6年生になって、今年は絶対に歩かないで頑張ろうと思いました。でも、みんなに追い抜かれると嫌な気持ちになるし頑張る気持ちが減ってしまうので、走っていてしょんぼりしないために、初めから一番後ろで走り出しました。今年も、最後まで歩かないで走れました。そして、タイムも去年よりずっと良くなって、本当にうれしかったです。」

父は、その時に、スタートラインの後方で一人佇む娘の真意を初めて理解した。そして、あの日あの時、あんな感情を抱いた自分を大いに恥じた。自分が抱いたマイナスの感情を娘に伝えなくて本当に良かったと述懐した。



この話は、かつて、新潟青陵大学大学院教授の碓井真史先生からお聴きした、先生自身と先生のお嬢さんとのエピソードです。

碓井先生は、重大な犯罪や事件が発生するとマスコミからコメントを求められるなど、全国レベルのテレビ・ラジオ・新聞・雑誌に頻繁に登場する、言わずと知れた全国的に有名な社会心理学者です。

また、数十年にわたって、新潟市のスクールカウンセラーの一人として活躍していただいています。

私と碓井先生の出会いは、お互いがまだ30歳代の頃に遡ります。私が当時勤務していた中学校に、スクールカウンセラーとして年度途中に配置されたのが碓井先生でした。スクールカウンセラーが学校に配置される試みが始まった本当にハシリの頃でした。今でこそ、スクールカウンセラーは全市展開になっていて、教育現場に欠かせない当たり前の存在ですが、当時は、我々教職員ですら、「スクールカウンセラーって？何するの？」という状況でした。

全校集会での着任の挨拶は実に鮮烈でした。演題に用意したスタンドマイクをやおらはずして手に持つと、颯爽と演題の前に進み出ました。そして、その軽妙酒脱な底抜けに明るくユニークな話術に全校が引き込まれたのです。私自身、この人はただ者ではない、と思った鮮明な記憶があります。

さて、碓井先生は、人間が幸福になるには、目標に向かっていく段階で、自己肯定感を高めるということが重要であると説いています。同感です。社会心理学では、自己肯定感を高めるためには、周囲から愛されている実感がある(包み込まれ感覚)、人と話が通じる・わかってもらえるという実感がある(社会性感覚)、自分は最後までがんばれる人間だと実感できる(勤勉性感覚)、自分を受け入れ自分を好きになれる(自己受容感覚)、が必要だといえます。

もし6年生のマラソン大会の後、碓井先生が娘さんに次のように言ったらどうだったでしょうか。

「また、今年もビリだったね。あんなに後ろの方からスタートして、初めから全くやる気が感じられなかったなあ。もちろん結果は期待してなかったけどさ、もう少し頑張れたんじゃないの。お父さん仕事休んでわざわざ見に行ったのに……。」

これは、もう完全にアウトです。子どもはひどく傷つき、どんなに自分なりに精一杯頑張っても、どうせダメなんだと思ったに違いありません。これは、決して人間が幸せになる過程ではありません。碓井先生はさすがでした。

才能や能力に個人差はありますが、子どもたちはすべからく自分の個性や能力を生かして、人生を輝かせたい、自分を輝かせたいと思っているはずで、そういった思いをつぶしてしまうのは、本人の努力不足ではなく、時にして周囲の環境なのです。

人間にとって最も大きな環境は人間です。子どもの幸せのために、子どもを取り巻くすべての人間の人間力が問われているとあらためて痛感します。

私も、息子と娘が中学時代に、部活の大会や練習試合で応援に行くことがありました。よく口にしていたものです。「何で勝てないの？努力が足りないんじゃないの？もうちょっと頑張れないの？せっかく見に行ったのに。」

子どもたちは、そんなことを言われる筋合いはないという理不尽さと、家族や応援してくれる周囲の期待に何とか自分も応えなくてはならないという気持ちの狭間で、さぞ苦しんだことだろうと今更ながら猛省します。

いよいよ市内大会の決戦を迎えます。勝てなくてもいい。勝たなくてもいいのです。願うのは、周囲から愛され・応援される・励まされるに値する戦いぶりをみせてほしいということのみです。

私は、最後の最後まであきらめないで頑張る君の姿をこの目に焼き付けたいだけなのです。